

3. 遺伝子依存症リスクスコア (GARS) : 報酬欠陥症候群 (RDS) 傾向の 分子神経遺伝子エビデンス

要約

私たちは特にドーパミン作動性機能に関連する遺伝子についての脳報酬システムの神経遺伝学について幅広く出版しています。1996年に、私たちは遺伝子に基づくハイポドーパミン作動性機能との関連性が見受けられる行動様式を表すために「報酬欠陥症候群」(RDS)という新語を作りました。RDSは通常概念として薬物使用障害(SUD)、依存症、さらに他の偏執狂的、強迫、衝動的行動への理解を深めるためにその後多くの研究で使われてきました。興味をひくことに、他にもありますが、ある研究発表の中で、得られた遺伝子依存症リスクスコア(GARS)データのみを評価して回復期にある依存症患者(17年間しらふ)の生涯にわたるRDS行動について詳細に述べる事が出来ました。私たちは、若年における遺伝子テストは治療薬や治療活動を減らしたりあるいは無くすための効果的な予防戦略になり得るだろうと、仮説を立てています。この中で私たちは、選出した遺伝子、その多形性さらにGWASを活用することで報酬候補遺伝子に集中するエビデンスが存在するRDS関連のリスクについて考察します。提示したエビデンスは、一人ひとりの患者に沿って彼らの回復を高めてぶり返しを防ぐために目的の治療を補強する、適切な遺伝子情報を提供する信頼性のある脳プリントとして役立ちます。RDSの初期ドライバーは後成遺伝状態(クロマチン構造上のメチル化、非アセチル化)のみならずハイポドーパミン作動性特質(遺伝子)です。私たちは適切なエビデンスに基づいた治療と早い段階における遺伝子診断を要し、さらに集中研究が要求される脳報酬神経回

路内の病理状態として、依存症及び RDS の神経科学を含めた依存症医学の分野で今や新時代に入っているのです。